



平城京 はじまりの 人

、奈良の都のナンバーワン、

平城宮跡資料館 平成26年度 夏期企画展

『平城京ビックリはくらんかい - 奈良の都のナンバーワン -』

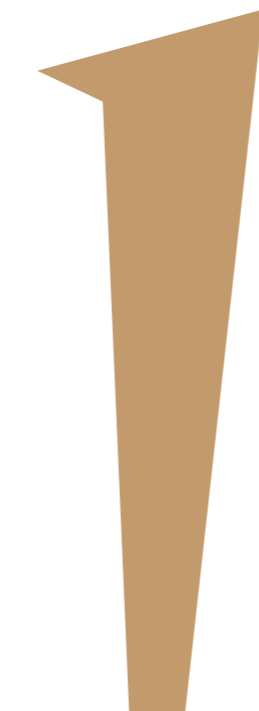
発行日 2014年7月12日

発行 独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市佐紀町247-1(仮設庁舎)
<http://www.nabunken.go.jp/>

企画編集 奈良文化財研究所 展示企画室

表紙デザイン・イラスト 市原 夕貴

印刷 能登印刷株式会社





へいじょうきやう
奈良時代の都、平城京…。

へいじょうきやう
その中心にあった平城宮のあと地で
本かくてきな発くつが始められたのは、今から65年前のことです。

発くつをすると、ときどきビックリ！するような発見に出会うことがあります。
とても大きいもの、とても小さいもの、とても多いもの、とても少ないもの、
とてもウマいもの、とても手ぬきなもの、とてもやっかいなもの、
とてもかわったもの…。

65年間におよぶ発くつで出会った、さまざまなビックリ！発見の中から、
いちばんビックリ！するものをあつめて、
へいじょうきやう
このたび「平城京ビックリはくらんかい」を開さいすることにしました。

いちばんビックリ！を、ありのままに楽しんだり、
どうしていちばんビックリ！なのか、に注目したり、
もっと他にいちばんビックリ！がないか、さがしてみたり…。

へいじょうきやう
いろいろな見方で「平城京ビックリはくらんかい」をお楽しみください。

3.3cm と 0.2cm

“木簡(もっかん)”に書かれた文字でいちばん小さいものは、まぎ物のじくの先っぽに書かれたもので、直径12.2cmの円のまわりに18文字も書かれているよ。

いちばん大きい文字は、今のところ“かわら”をつくっていた工房(こうぼう)で書かれた木簡のものかな。小さい文字と比べると、なんだか筆の太さもぜんぜんちがうみたいだね。



18

実物大

119cm と 6.5cm



実物大

平城京に住む人たちは、病気やよくないことが起きた時、それを人の形をした木の板-人形(ひとがた)-に乗りうつして水に流すおまじないをしたんだよ。

人形はふつうはかた手に乗るぐらいの大きさなんだけど、子どもの大きさに近い大きいものを使った時もあったみたい。とってもなやみが大きかったのかなあ。



実物大

20.6 Kg

たて物の屋根のはしっこやすみっこの部分に使う瓦(かわら)を見たことがあるかな?これは“鬼瓦(おにがわら)”っていうんだけど、ここに鬼(おに)の顔がかかれるようになったのは平城京の時代になってからなんだよ。

いろんな顔をした鬼瓦が作られたんだけど、これはなかでもいちばん大きくて、一番重いんだ。屋根に乗せたしよくにんさんは力持ちだったんだろうね。



8

15

36cm と 7.8cm

仕事で文字をたくさん書かないといけなかった平城宮ではたらく役人たち。

今、みんなが習字で使う“硯(すずり)”は石でできているけど、平城宮ではやぎ物の硯が使われていたんだよ。それに、形は四角ではなくて、丸かったり動物の形をしていたり。

大きさもさまざまなんだけど、これほど大きいものはとってもめずらしい。みんなでいっしょに使ったのかもしれないね。



7



6

125cm と 2.8cm

平城宮や平城京の発くつでは、文字が書かれた木の板、“木簡(もっかん)”がたくさん出土するんだけど、書いてある内によって形や大きさがぜんぜんちがうんだよ。

いちばん長い木簡は長屋王(ながやおう)っていう貴族(きぞく)のおやしきがあった場所からみつかったもの。ぎやくにいちばん短い木簡は平城宮の役所の近くで見つかったもの。なんだかなくしちゃいそうな小ささだね。



16

9

12

最大・最小の 軒瓦 屋根の先端を飾る軒瓦も大きささまざま。大きさの違いはなんの違いなのでしょう。最大の軒瓦の出土数は少なく、鬼瓦の上部にのせて使われたと考えられています。屋根の中でも場所に応じて大きさを作り分けたのかもしれないね。一方、最小の軒瓦、軒平瓦は、いくつかの遺跡から比較的一定数出土しており、小規模な建物で使われたのではないのでしょうか。



11

9

10

12

最長の 文字 「行」という字を何度も練習した木簡ですが、行の最終画を、ふざけているのかと思うほど長く書いていますね。しかし、これはただの落書きではないようで、中国漢代の木簡でも、特定の文字を強調したり、その文字にアクセントを置くために、一部分を長く伸ばす書法が確認されているそうなのです。本場の書法を身につけようと必死に練習する役人の姿が目に見えそうですね。



19

最大・最小の 土器 平城京では、ままごと用かと思われるほどの小さい土器が出土することがあります。形や種類もいろいろ。祭祀の道具だとされていますが、特に食器類は子供の玩具だったとも考えられています。一方、非常に大きな土器もチラホラ出土します。これらは用途に応じて生み出された実用品で、例えば巨大な甕は「内膳司」という天皇の食事を準備した役所の倉庫の跡から出土しています。



3

4

2

1

ママちゃんき

1,000,000

とう塔の数



称徳天皇(しょうとくまんのう)という女せいの天のうが、日本が平和な国になるようにねがいをこめて、仏教(ぶっきょう)の教えにもとづいた小さな木の「塔(とう)」を作らせたという記ろくがあるよ。その数、なんと100万! かんせいまでに、やく6年もかかったんだって。

平城宮では、作りかけの部品が出土しているの、ここで作っていたことがわかったんだ。もしかして、しっばいしたのですてられたのかも!

みんなはどうしても上手に書けない漢字を、何度も何度もノートに書いて練習してみたりするよね? 実は、平城宮ではたらく役人たちも同じ。
発くつて出土する木簡(もっかん)の中には、同じ漢字を何度も書いて練習したものが見つかることがあるんだ。画数が多いとか、バランスがむずかしい漢字の練習をしたのかな? と思ったら、意外なことに「大」がいちばん多く練習されているんだって。

「大」の字を 練習した木簡数 511



大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大
大



井戸から出た 櫛の数の数 22

平城京では、生活にひつような水は「井戸(いど)」から地下水をくんでいたんだけど、その井戸を使わなくなるときには、土や色々なモノを入れてうめようとしたみたいなんだ。
平城京の中心・平城宮にあった大膳職(だいぜんしき)という役所の井戸からは、かみをとく「櫛(くし)」が22点も見つかったよ。櫛はまじないの道具として古事記(こじき)に登場するので、井戸をうめる時に、ねん入りに何かおいのりしたのかもかもしれないね。



たね種 の数の数 やく80,000



平城宮の役所の近くで見つかった「あな」から、8万点いじょうの植物のタネが出てきたよ。しゅるいはキイチゴのなかまとメロンのなかまがとても多くて、ほかにアケビのなかま、ナス、ヤマモモ、ブドウのなかま、イネなどがあつたんだ。食べのこしをすてた場所だったのかもしれないね。
このあなからは、寄生虫(きせいちゅう)のたまごやハエのサナギもたくさん見つかったので、トイレがわりにも使われたんだらうね。



瓦の花びらの 数の数 24と4



平城京のたて物の軒先(のきさき)をかざる丸いかわら-軒丸瓦(のきまるがわら)-は、ハスの花のもようだったってこと、知っているかな?
日本ではじめて瓦(かわら)がふかされた「あすか寺」(6せいき終わりのころかんせい)の軒丸瓦は、まさにハスらしいもようをしていたんだけど、時代がかわると花びらの形や数がさまざまになってきたよ。
平城京の軒丸瓦でいちばん多い花びらは24まい、ぎやくに少ないのは4まい(8まいに見えるけど、これは「ふくべん」といって2まい1組で1まいと数えるよ)。ハスというより、きくの花やクローバーみたいだね。

最少の
鬼瓦 平城宮や京跡で一番少ない、1~2点しかみつからない鬼瓦があります。
鬼瓦、といっても、鬼の模様ではなく、鳳凰文と唐草文が表わされていて、非常に珍しい意匠といえます。
鳳凰文鬼瓦は平城宮の内裏の近くで出土しており、天皇の身近なところを飾った特別な鬼瓦だったのかもしれないね。



最多の
銭 平城京の郊外にあった「頭塔」の心柱を抜きとった際に、心礎の上に埋納された「さし銭」。和同開珎4枚、萬年通寶34枚、神功開寶83枚、不明銭1枚の計123枚が紐に通されていました。
銭は地鎮祭祀や胞衣を埋納するときにもよく使われましたが、平城京でこれほど多い例は他にありません。123という数字にはあまり意味がなかったようですが…。

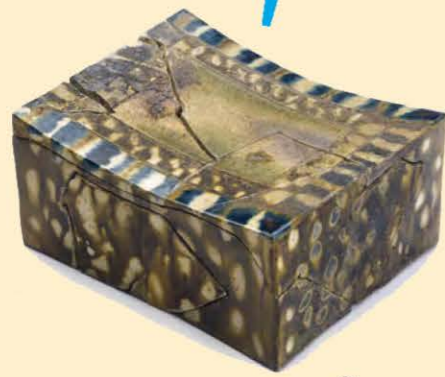
ママタシキ

最多の
文字(木簡) 文字数ナンバーワンの木簡は、藤原麻呂邸南側の溝から出土した食糧支給に関するもので、少なくとも230文字あります。とある日の飯の支給先と支給量を書いたものですが、なんと書かれた支給先は50か所ほど。長さも90cm近い大型の木簡です。これを失敗なく書き上げるのは大変だったでしょうね。



最多の
文字(土器) 不要になった土器の底に、「岡本宅誦申請酒五升」という文章を何度も練習したもの。読めるもので58文字と、最多文字数木簡には負けませんが、細長い木簡に比べてキャンパスが広い分、長い文章の練習をしやすかったのかもしれない。ちなみに、全く同じ文章が書かれた木簡(きっとこれが消書)も同じ場所から出土しています。

いちばん **寝にくい枕**



これは唐(とう、今の中国)という国から運ばれてきた“唐三彩(とうさんさい)”という高級なやき物のまくら。ねる時に使ったら、ちよっと頭がいたそうだね。本当に使ったのかな!?
平城京では大安寺(たいあんじ)というお寺でしか見つからないくて、なんと40こ分もあったんだ。

いちばん **おそろしい 出土品**



心臓(しんぞう)や目にクギがささった“人形(ひとがた)”が見つかったよ。右の人形には“坂部秋近(さかべのあきちか)”という名前が書かれていて、この人をのろったまじないの道具だったと考えられているよ。1300年もの間、クギがささったままとはおそろしい…

いちばん **こつてり あつてり な瓦**



平城京の時代につくり出された軒丸瓦(のきまるがわら)のまようは300しゆるくらいあるんだけど、その中で一番こつてりしたまようと一番あつてりしたまようはコレ。こつてりした方の軒丸瓦は、さらに表面に色がつけられていたよ。でも出土数がとても少ないから、作るのがたいへんだったのかもしいね。

いちばん **手ぬきな軒平瓦**



軒平瓦(のきひらがわら)は、軒丸瓦(のきまるがわら)と一しょに軒先(のきさき)に使う横長(よこなが)のかわら。平城京では唐草(からくさ)もまようのものが多く、西隆寺(さいりゅうじ)でみつかったこの軒平瓦はとてもめずらしい。型(かた)にねん土をおし当てるのではなく、シャツ、シャツとヘラで線をひいてかんせい。少ししか見つからないから、こつてり手抜きをしたのかも。

いちばん **おつがれな瓦の型**



これは、まようがいちばんボンヤリした軒丸瓦(のきまるがわら)。軒丸瓦の丸い部分は、まようをほった木がたに、ねん土をおし当ててつくり出すんだけど、何度も使っているうちに、木がたの一部がかけたり角が丸くなったりして、さいしょのまようよりくずれてくるんだよ。一番おつがれてことだね。

いちばん **有名な瓦職人**



人の名前が入っている瓦(かわら)が出ることがあるんだけど、“真依(まより)”という名前がいちばん多く見つかったよ。これはどうやら瓦をつかった工房(こうぼう)にいた職人(しょくにん)の名前で、自分のせきにと、どれだけ作ったかをしめすために名前入りのスタンプをおしたみたいなんだ。一番の仕事人だったのかな?

いちばん **ボロボロな土器**



出土したときにほとんどがわけてボロボロで、ちゃんと使えたのか心配になる土器(どき)があるよ。実は、これは海水を入れて火にかけて“しお”をつくるための入れ物で、食器(しょっき)ではなかったんだ。なめてみたら今でもしょっぱいかな?

いちばん **くそそうな土器**



この土器(どき)には墨(すみ)で“小便(しょうべん)”という字が書かれているよ。平城京の人たちは、トイレ代わりにこういう土器を使って、たまったらどこかにすてに行ったのかもね。形が食べ物を調理するときに使う土器と同じだから、うっかりまちがえないように“小便”と書いておいたのかな。

いちばん **やっかいな出土品**



平城宮の役人は、いつも新品の木簡(もっかん)に字を書いていたわけじゃないんだよ。いらなくなった木簡の字を小刀でけずって消したりサイクル品をたくさん使っていたんだって。そのけずられた部分が“削履(けずりくず)”で、平城宮でみつかる木簡の多くがこれなんだ。丸まっていたりおわっていたりするので、これをまっすくにのばして整理する作業がとってもたいへんだよ。

いちばん **奇妙な木簡**



文字が書かれている四角い木簡(もっかん)の上に見えるのは…2つの耳! 書かれている文章は耳にかなする話ではないから、いらなくなった木簡をすてる前にラクカキしたんだろうね。それにしても耳だけかくなて、きみょうだなあ。

依違高麗使迎來 追上泳一駄下



いちばん **ウマい! ウマくない! 字**



木簡(もっかん)の文字にはキッチリ書かれていて読みやすい字や、大きさがバラバラだったり、何を書いているのかわからないような字なんかがあるよ。使い方によっては、せつたいに上手に書かないといけな木簡もあったんだって。とてもきんちょうしたんだろうね。

いちばん **バラバラな木簡**

この木簡(もっかん)には、「七」の字の上から「六」が重ねて書かれて、さらに右下に「半」が小さく書かたされているよ。米のりょうを、七升(ななしょう)から六升半(むいしはん)に書きかえたみたいなんだけど、小刀で字をけずるのがめんどうさかったのかな? 書き直す前の字が見えちゃってるね。



7 げ た 下駄

今の下駄(げた)とちがって、右足用と左足用が区べつされていたようだ。台の上には、はいた人の足あとがへこんでのこっていることもあるんだって。

ものさし

9 今のさいほう箱にも入っているようなものさしだね。めもりはcmやmmではなくて、寸(すん。1寸=やく3cm)や分(ぶ。10分=1寸)というたんにて線が引かれているよ。



10 耳かき

11 この形は、今の耳かきと全く見分けがつかないね。きそくのやしき近くで出土しているから、ぜいたく品だったのかな？

サイコロ

今と全く同じ形だけど、向かい合う数字の合計が7にはならないんだ。平城京の時代には、この他にもだん面が六角形や八角形のサイコロもあったんだよ。



12 木とんぼ

今のように竹ではなく、ヒノキからつくられた木とんぼ。平城宮の役所が集まる場所の近くで見つかったよ。役人が仕事の合間にとばしたのかな？



すず 鈴

ドラえもんが首につけている鈴(すず)にそっくりだけど、平城京の井戸(いど)や溝(みぞ)からみつかっていて、まじないの道具だったと考えられているよ。今でもとてもいい音になるんだ。



さん 算木

細長い木にきざみ目をいれたもので、何本も組み合わせて数を計算する道具だよ。そろばんみたいなものだね。



えび じょう 海老錠

たて物のとびらや箱にとりつけた“海老錠(えびじょう)”という錠(かぎ)。形がエビっっぽいから、こういう名前になったよ。



き 木靴

木をくりぬいてつくっているんだけど、足がいたそうだね。足のサイズが18.5cmぐらいのものもあるんだけど、子ども用だったのかな？！



しょう ぎ 箸木

このほうきれ、お箸(はし)や木簡(もっかん)ににているけれど、よく見つかる場所はウンチの中にふくまれる寄生虫(きせいちゅう)のたまごがたくさんいる“あな”…。そう、これは古代のトイレトペーパー！それにしてもいたそうだね。



1300年前から…



ぎ ぼ し 擬宝珠

擬宝珠(ぎぼし)は、川にかかる橋のらんかん(手すり)の柱かざりのこと。これは平城宮が面する二条大路(にじょうおおじ)わきの溝(みぞ)の橋にかざられていたもので、なんとやき物なんだ。

はし 箸

お箸(はし)がさかんに使われ始めたのは、平城京の時代といわれているよ。このころはまだ、天皇(てんのう)や貴族(きそく)、役人など、かざられた人々しか使っていなかったかもしれないんだって。



いらなくなった土器(どぎ)や木簡(もっかん)に、かけ算の“九九”を練習したものがみつかることがあるよ。今はぎやくで、「九九八十一、八九七十二、七九六十三…」と大きい方から読んだようだよ。アレ？この写真の九九は計算をまちがえてる!?

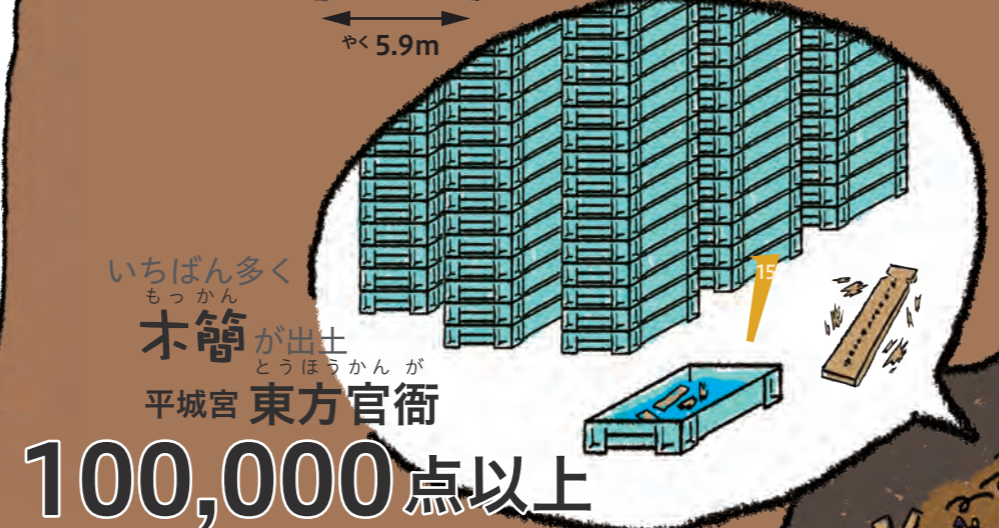
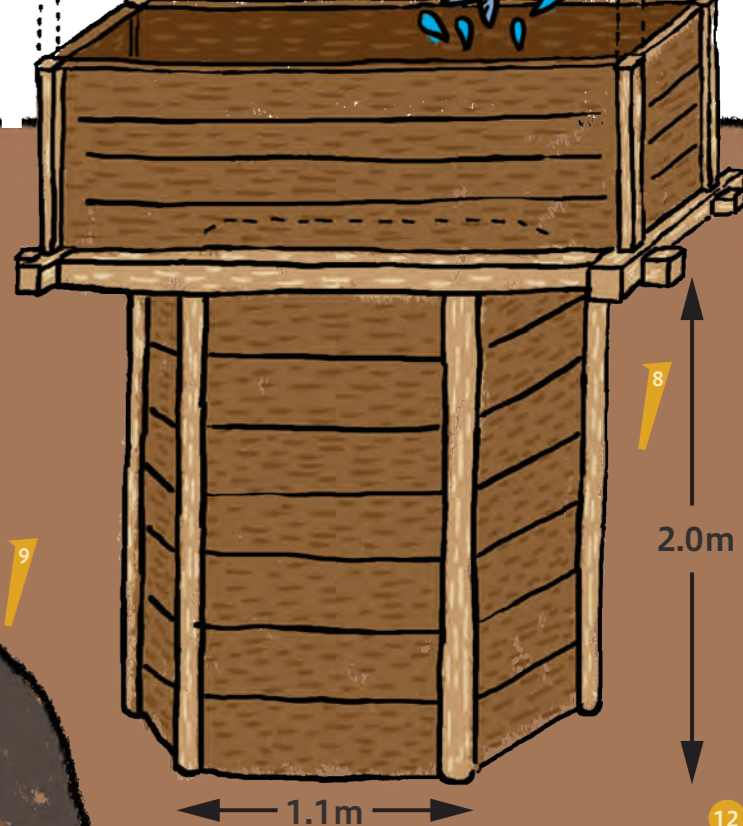
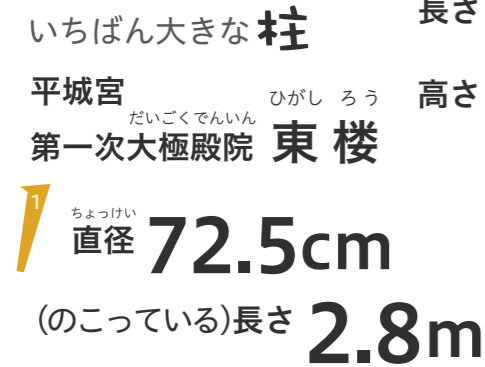
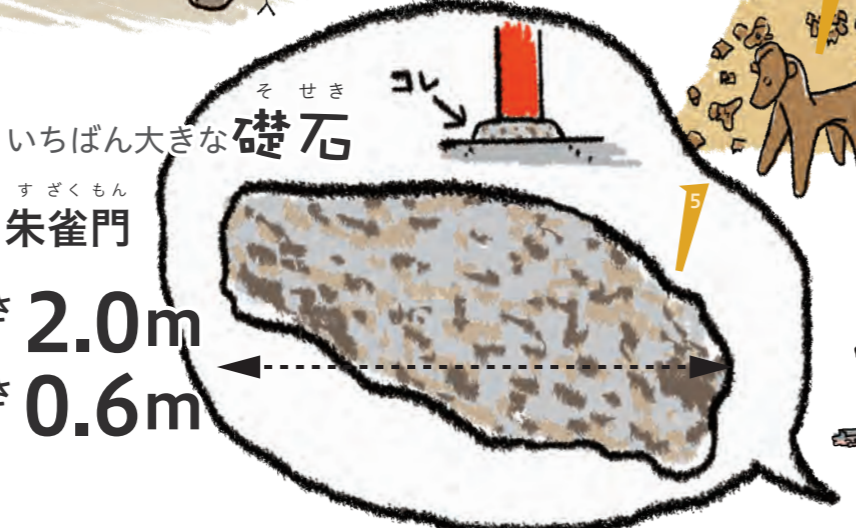
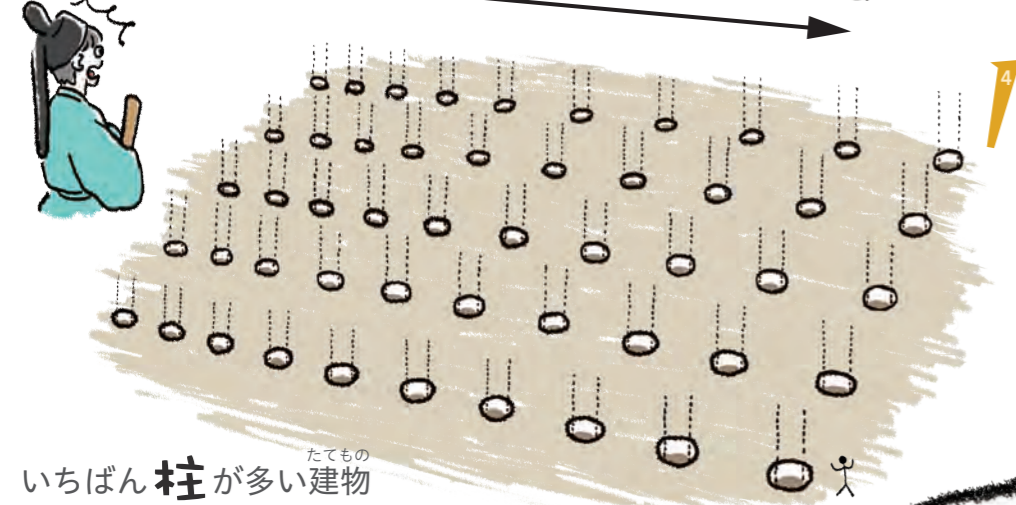
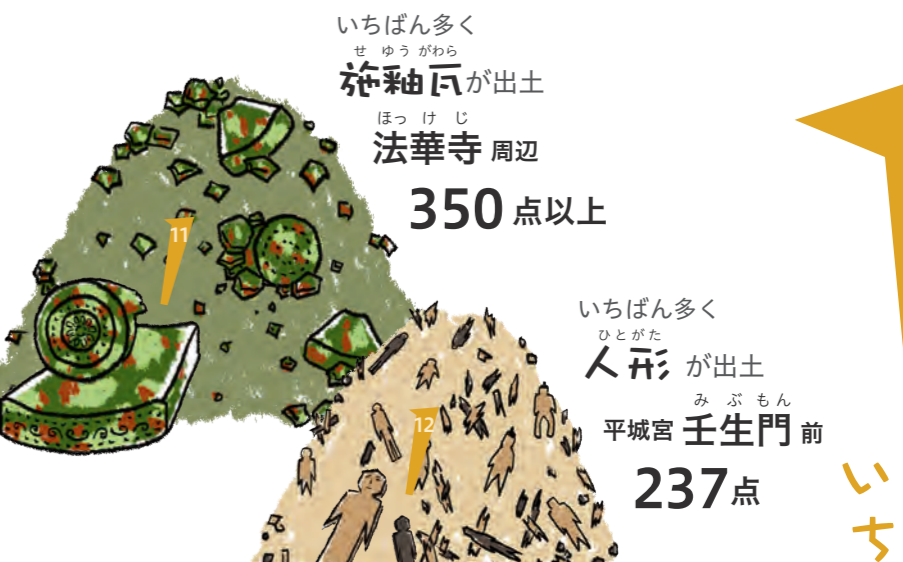
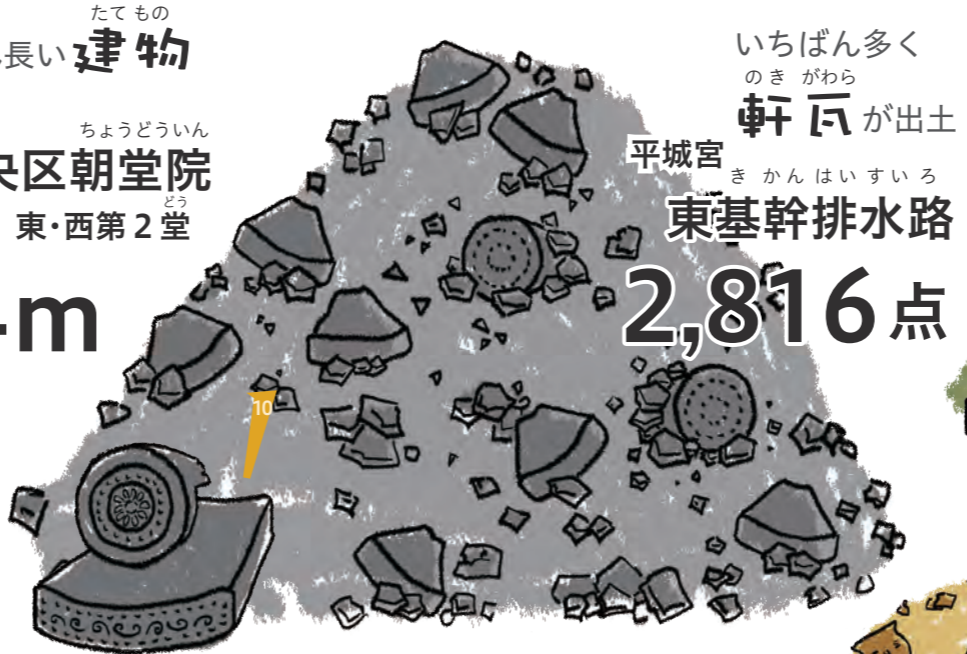
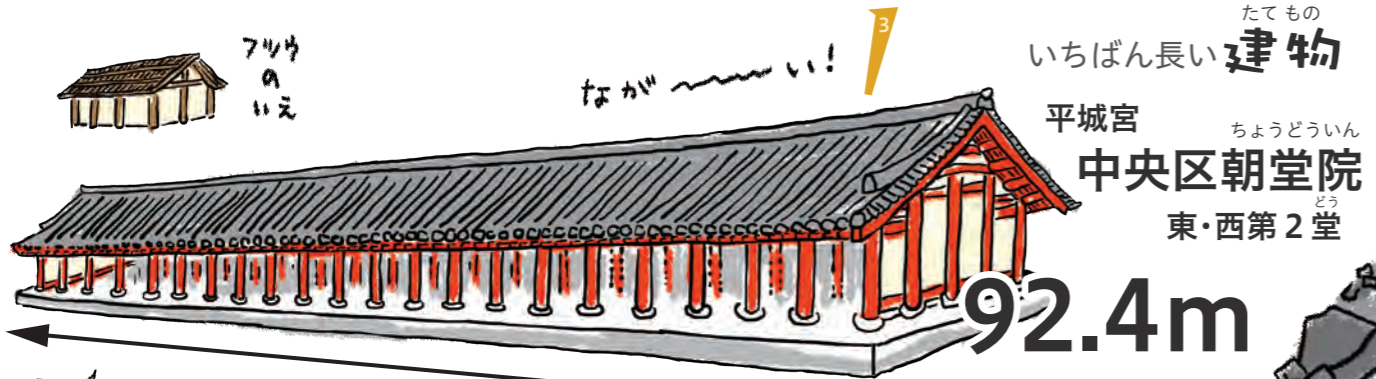
く 九九



今のガラス鏡(かがみ)とはちがって、平城京の時代には金ぞくの板をピカピカにみがいて、すがたをうつしていたよ。色まではうつりにくいから、“おけしょう”はむずかしかったんじゃないかなあ。

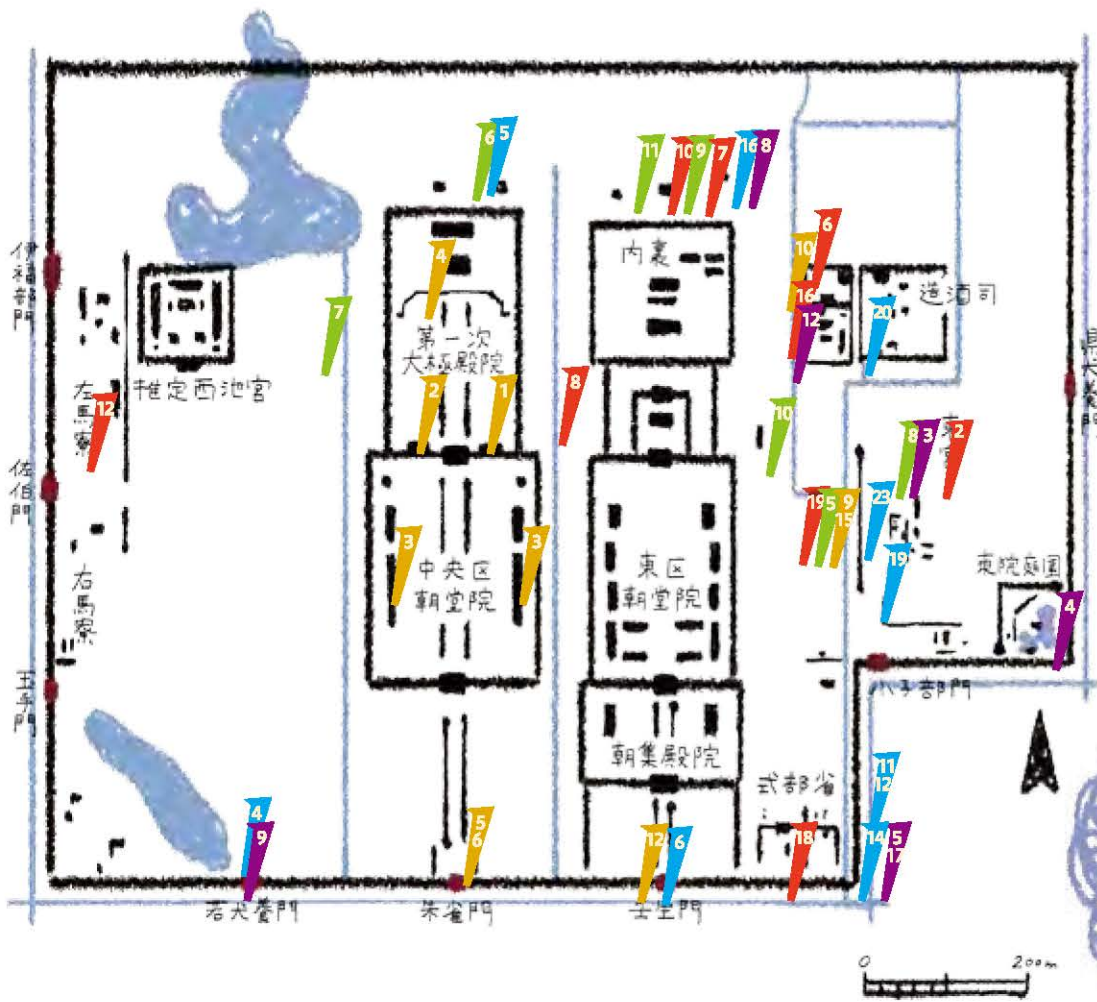
かがみ 鏡





つんじでできない
つんじでできない

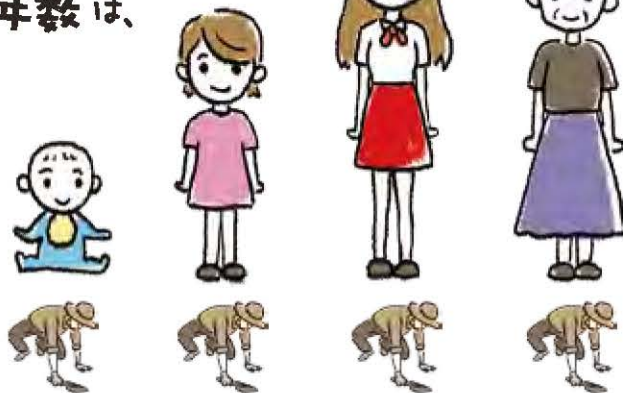




奈良文化財研究所による
平城宮・京の

ちようさ
けいぞく調査

年数は、



65年

一人の研究員が
はっくつ
発掘たんとうした数

いちばんは

42調査

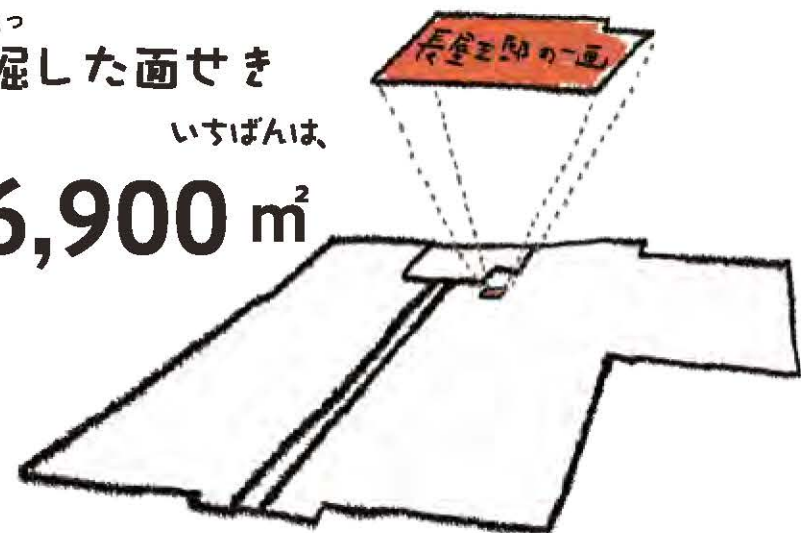


一度の調査で

はっくつ
発掘した面せき

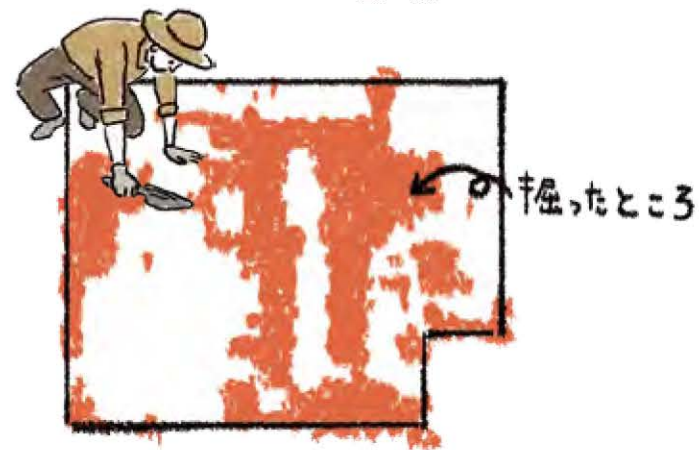
いちばんは

6,900 m²



はっくつ
平城宮で発掘されたのは

全体の... 30%



ここ数年で...
写真撮影の日に

雨にふられた回数 いちばんは

6回

